

2024年11月5日
第8回 国際津波防災学会総会

防災における情報リテラシー

都市共生防災分科会 幹事

佐藤 裕亮（立教大学社会情報教育研究センター）

本講演全体の目次

- 活動報告
- これまでの分科会活動の振り返り
- 「防災における情報リテラシー」報告

都市共生防災分科会 活動報告

- 会員のリクルート
→社会学・人類学の研究者を継続的に勧誘中
- 令和6年能登半島地震に関する研究テーマの検討
- 都市における共生・防災を阻害する要因として「災害流言」を一つのキーワードにしたとき、「ソーシャルメディアの計量テキスト分析」は、軸の一つとしてありうる
→**災害をきっかけに、分断・混乱がいかに生じるのか？**
- 秋～冬にかけての共通テーマとして、研究予定

これまでの分科会の振り返り

- 2022～2023年：「外国人と防災」が主たるテーマ
- 2022、近藤秀将「ホモ・サケルとしての外国人技能実習生」
『Ten = 天 : tsunami, earth and networking : the journal of International Tsunami Disaster Prevention Society』 3: .70-78.
- 外国人技能実習制度の歪みを「排除を通じての包含」という視点から論じる。その理論的枠組として、アイファ・オングの「新自由主義からの例外」およびジョルジョ・アガンベンの「ホモ・サケル（聖なる＝法外の間人）」を採用。
- 「災害弱者としての外国人」の中にも、社会（法や制度、規制等）との関連の中で様々な差異が生まれることの指摘。

これまでの分科会の振り返り

- 2023年度国際津波防災学会合同分科会（2023/06/27）
分科会幹事を近藤から佐藤に引継ぎ、報告。
「都市防災と外国人：入国管理行政における行政書士の役割」
「都市防災と外国人：就労外国人と防災のかかわり」
- 行政書士事務所での参与観察・就労外国人との交流を通じて得た視点をベースとして、外国人が「災害弱者」となる要因と構造を検討。

これまでの分科会の振り返り

- 2023～2024：防災と情報
- 第7回 国際津波防災学会 総会／学術集会（2023/11/01）
- 佐藤報告「関東大震災と〈共〉の領域：防災と災害流言」
- 「関東大震災から100年」ということで、社会学者・清水幾太郎と佐藤健二による「関東大震災における流言蜚語」研究を概観しながら、そこに「防災」という観点を付け加えることで、「**防災における流言**」についての**共通理解**を提案
- 流言の発生を予期したうえで、どのように流言による被害を最小限にできるかがポイント

これまでの分科会の振り返り

- 国際津波防災学会合同分科会（2024/06/28）
- 佐藤報告「間メディア社会と災害：令和6年能登半島地震後のTwitterの計量テキスト分析」
- 情報が複数のメディアを横断しながら拡散する「間メディア社会」において、災害情報はどのように拡散・発信される？
- 2024年1月1日から1月21日までの「ボランティア」という語を含むTwitterの投稿分析
 - 災害情報を求めているのは誰なのか？ 災害に対して当事者ではないからこそできることは何か？ を考えた情報発信

防災における情報リテラシー

- 報告の目次：
- 「リテラシー」の情報学的定義とは？
- 「情報リテラシー」の情報学的定義とは？
- 「メディア・リテラシー」の情報学的定義とは？
- 「批判的」とはどういう意味なのか？
- 災害時のコミュニケーションの傾向
- 今後の活動予定

防災における情報リテラシー

- 「リテラシー」の情報学的定義とは？

「一般にある特定のメディア・テクノロジーによって伝えられた記号や表象を、言語情報としてシステムテックに解読し活用できる能力のこと。……「メディア・リテラシー」の教育は、テレビや音楽産業など現代的な意識産業の効果や基盤を理解したうえで**批判的に使いこなす能力**の形態と育成を主題化した。」（佐藤 2002: 970）

防災における情報リテラシー

- 「情報リテラシー」の情報学的定義とは？

「日本語では、情報活用能力とほぼ同義で用いられる。情報活用能力は、1986年の旧文部省答申によれば、「情報および情報手段を主体的に選択し活用していくための個人の基礎的資質」と定義づけられる。……基本的には、information literacyも情報リテラシーも、より広い概念としてのメディア・リテラシーの中に含まれるものとみてよい。ただし雑誌や書籍などを通じて一般に流布している情報リテラシーという言葉には、情報を批判的に読み解くという意味が希薄であり、情報技術の活用能力としての意味が強い。」（水越 2002: 474）

防災における情報リテラシー

- 「メディア・リテラシー」の情報学的定義とは？

情報社会の中で、人間がメディアに媒介された情報を、構成されたものとして批判的に受容し、解釈すると同時に、自らの思想や意見、感じていることなどをメディアによって構成的に表現し、コミュニケーションの回路を生み出していくという、複合的なコミュニケーション活動のこと。（水越 2002: 925）

- ここで共通するキーワードとして出てくる「批判的」とは、どのような意味なのか？

防災における情報リテラシー

- 「批判的」とはどういう意味なのか？
- 言い換え……距離をとる、巻き込まれない、だまされない、疑う
- 「批判的ではない」＝距離をとれない、巻き込まれている、だまされる、信じ込む
- すると、例えば「情報を批判的に読み解く」とは、「情報に対して距離をとれる／巻き込まれない／だまされない／信じ込まない」ということか？
- しかし、**災害時にそれはどこまで可能なのか？**

防災における情報リテラシー

- 災害時のコミュニケーションの傾向

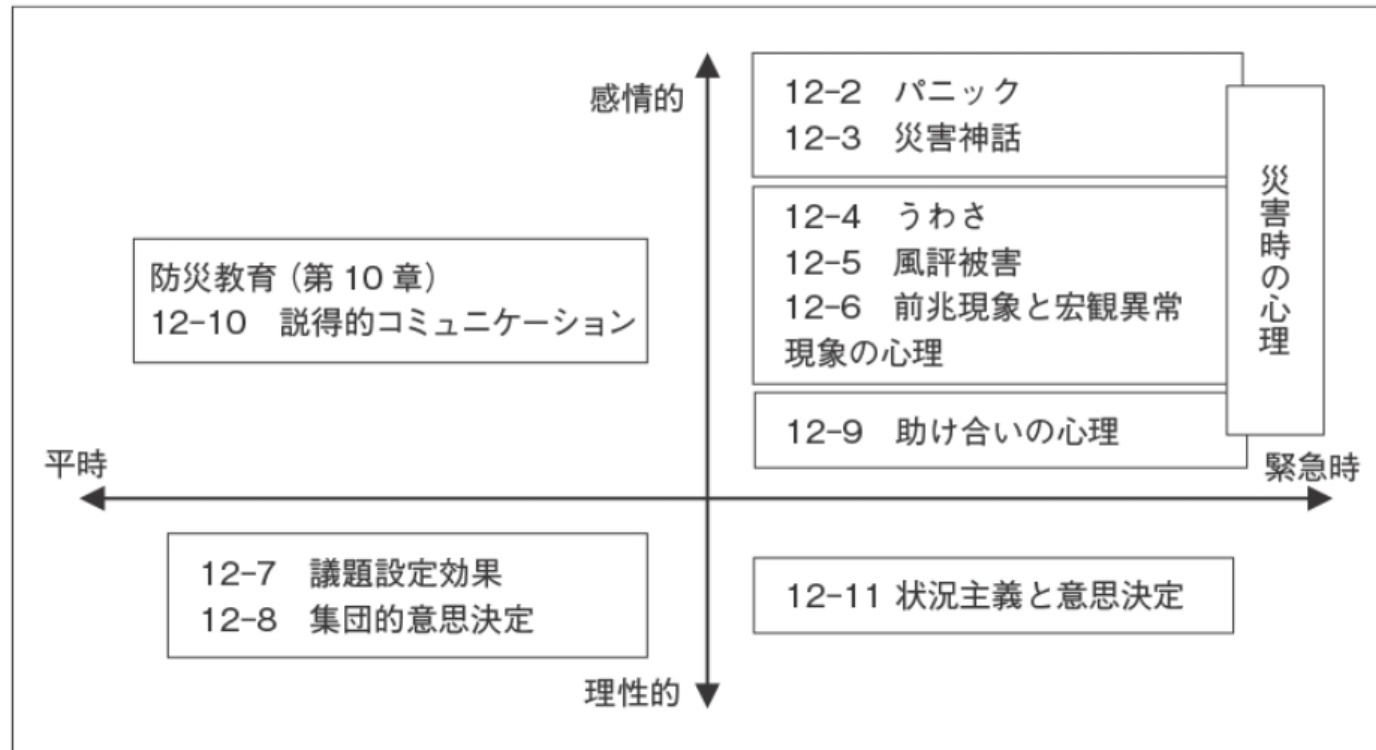
「災害時には人びとの不安が高まり、情報ニーズが高まるにもかかわらず「情報不足」が発生する。結果、その穴を埋めるために「うわさ」(12-4)が発生する。これらは、不安の裏返しであり、災害被害の行き場のない憤りを確認しあうという行為である。……災害対策の混乱をさけるため、うわさには注意が必要である。「前兆現象と宏観異常現象の心理」(12-6)も、その現象自体は事実であるものの、その現象が災害を予知しているわけではない。災害は予知されてほしいという願望の裏返しとして、その情報の伝達構造自体は流言に近い。(関谷 2016: 280)

- 災害時、人は「批判的思考」が難しくなる。

- その理由は、おそらく「感情」の支配（次ページ図参照）。

防災における情報リテラシー

図：災害とコミュニケーション（関谷 2016: 281より引用）



防災における情報リテラシー

- 防災における情報リテラシーのポイント
- 災害時の「感情的なコミュニケーション」をどのように抑制するか？（平時の難しさと共に）
- そのためには、過去の事例を知り、学ぶことは必要（いつ、どこで、どのような「感情的なコミュニケーション」があったのか、それはどのように発生し、抑制されたのか...etc）
- 今後、もうしばらく「防災と情報リテラシー」について研究を進めていく予定。

参考文献リスト

- ・ 水越伸、2002a「情報リテラシー」北川高嗣・須藤修・西垣通編『情報学事典』弘文堂.
- ・ 一一一、2002b「メディア・リテラシー」北川高嗣・須藤修・西垣通編『情報学事典』弘文堂.
- ・ 佐藤健二、2002「リテラシー」北川高嗣・須藤修・西垣通編『情報学事典』弘文堂.
- ・ 関谷直也、2016「プレビュー：コミュニケーションの心理」日本災害情報学会編『災害情報学事典』280-1.